

若年層のひとり暮らしについて (1) 一住生活の実態—
 大阪教育大 岸本幸臣 同○大村育代 同 新家増美

目的；本研究は、ひとり暮らしの若者の生活を把握し、1室多機能型住生活の実態、及びそれに対する意識の特性を明らかにすることを目的としている。尚、本研究は、高齢者の住生活に関する比較研究の一環として実施したものである。

方法；大阪府下に在住するひとり暮らし若年層（学生92人・社会人24人）を対象に、直接配票・直接回収方式によるアンケート調査を実施。（調査実施期間：昭和58年6月）。

結果；(1)住居条件；男女共、7割は1年以上ひとり暮らしの経験を有している。アパート居住の割合は男子に高いものの、居住水準は1室の者が6割、別にもう1室（DK・K）を保有している者も男女同程度である。また、主に過ごしている居室の広さは平均6.4～6.5畳である。(2)住生活の実態；その中で展開されている日常生活を生活行為との関わりで捉えてみると、1室に持ち込んでいる行為の種類は男子よりも女子に多い。このことは、女子の場合、現在の住空間を“一般の家庭の縮小版”とみなしている割合が4割と高い点にも端的に現われている。ところで、その中で分離したい行為を把握すると、男女とも就寝と食事をあげている。日常の生活の規律度を、食事や就寝行為からみると、夕食後の食器を次に使用するまで放っている割合が男性に高く（2割）、また寝床の後始末についても、男子の場合、敷いたままにしている者は2割も存在する。男子の方に日常の生活のペースさがうかがえ、このことが、何か探し物をする際にも“なかなか見つからない”といった生活（部屋の使用・管理）の混乱となって現われている。即ち、男子の場合には、やや無秩序な1室多機能的な生活展開の側面もうかがえる。